

【古代前期部門】

0802 教室 一四時五分開始

『古事記』 大国主神の国作りにおける  
「追伏」「追撥」について

海田 喜一

『古事記』において、大国主神は須佐之男命から賜わった言葉に従って八十神を「每坂御尾追伏、每河瀬追撥」ことで国作りを開始することが語られる。この大国主神の国作りは、伊耶那伎神・伊耶那美神が天神の命を受けて行った「修理固成」が、黄泉国での伊耶那伎神の「吾与汝所作之国、未作竟」との発話によって未完のまま終わった国作りを引き継いで行われることが先行研究で指摘される(『古事記伝』『古事記注解』など)。

本発表では、大国主神の国作りの冒頭を担う八十神を「追伏」「追撥」という行為が、この後に行われる少名毘古那神の助力を得て国を「作堅」こと

や、「吾独何能得作此国」と訴えて御諸山に神を祭祀するような「作」と明示される例とは異なっており、即座に国を「作」る文脈に換言され難いという表現上の問題を指摘した上で、八十神を「追伏」「追撥」ことがどのような機能において国作りに値するのかを改めて位置付け直すことを狙う。

(皇學館大学大学院)

『古事記』神武天皇条・天皇の御歌考  
村上 倫子

『古事記』神武天皇条において、天皇は狭井河の伊須気余理比売の家を訪れ「一宿御寝」する。当該説話は神代の邇々芸命と木花佐久耶比売が「一宿婚」・「一宿妊」する神話の構造と類似しており、西郷信綱(『古事記の世界』)も「ホノニニギから神武に至る系譜は実は同一過程の反復」で「聖婚

における御子の誕生の意味を強調的にかたろうとし」ていると指摘する。一方当該説話は天皇の「一宿御寝」で伊須気余理比売が「妊」むことはなく、宮に参内後の天皇の御歌を通して「御子」が誕生する。邇々芸命の結婚神話の「反復」でありつつも、天皇の御歌によって御子の誕生に繋がる点は当該説話の特徴である。天皇の御歌「あしはらのしけしきをやにすがたたみいやさやしきてわがふたりねし」は、伊須気余理比売と共寝した場所の状態がどのように作られたかという内容が中心になっている。共寝の場を歌うことが「御子」の誕生にどのように関わるのかを検討する。

(東京都立大学大学院)

有間皇子自傷歌群における一四六番歌の異質性と機能

谷 信吾

本発表は、卷二挽歌冒頭の有間皇子自傷歌群における一四六番歌を対象に、その歌群内での機能を考察する。当該歌は、一四五番歌左注の包摂外にあり、具体的な年代・行幸を示す題詞と「柿本朝臣人麻呂歌集中出也」の注記を持つ点で、歌群内において異質である。このため従来は、混入・追補の歌として、主として編纂過程の問題から説明されてきたが、本発表では、現行本文において当該歌がそこに置かれている意味を問う。すなわち、一四一番歌の「ま幸くあらばまたかへり見む」が示す未完の未来を、当該歌が「後見むと君が結べる」「またも見むかも」という表現によって受け直し、「磐代」の「結び松」を追慕の起点として再提示する歌であることを論じる。さらに、行幸を示す題詞によって、有間皇子の死が持統・文武の威光のもとで追悼された出来事として位置づけ直され、卷二挽歌の皇統史の内部

で語られるべき過去として立ち上がることを明らかにする。

(名古屋大学大学院)